

有島武郎全集

第十五卷

有島武郎全集

江蘇工業學院圖書館

藏書章

第十五卷

筑摩書房

有島武郎全集第十五卷

昭和六十一年九月二十日 初版發行

著 者 有 島 武 郎

發行者 布川角左衛門

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番號 一〇一—九一
電話 〇三(四)七六五一(營業)

〇三(四)六七一一(編集)
振替 東京 六一四—一二三

印刷 株式會社精興社
製本 株式會社鈴木製本所

ISBN4-480-70915-0

Printed in Japan

目次

雑纂

文稿	三
〔スケッチ帖より〕	二
〔『用無遺稿』自筆跋文〕	三
〔一九〇三年ノート〕	五四
Bibliography	五三
Book list	五三〇
Notes and Comments	五三四
Notes in Library of British Museum	五〇一
Bliss Socialism	四六四

「イプセン・ノート」	四〇〇
留萌英語研究會へ送付セル雜誌原稿	三九五
L. Tolstoi “What is Art”	三九三
今ノ藝術ノ爲メニ	三九五
Creative Evolution 梗概	三六一
「ホイットマン、シェイクスピア、ダンテ・ ノート」	三六六
〔讀書ノート〕	三六九
弱者原稿	三六二
Jean-François Millet	三六一
かずえの手紙	三四
〔文學論〕	三六
Study of H. Ibsen	三七

Ibsen 雜感	一六
〔「運命の訴へ」資料〕	一七
Notes on Walt Whitman	一五
Rabel Varnhagen/Lord Byron	一四
〔農場解放記念碑文〕	三〇
組合基本財産中ヨリ控除ヲナスヘキ土地及物 件	三
〔願書・届出〕	三
〔履歴書〕	三
〔原年譜〕	三
〔試験問題〕	二〇
〔斷片〕〔一〕—〔十五〕	四
〔斷片〕〔十六〕—〔三十〕	二九

〔手帖十三〕……………五

〔手帖十四〕……………六

〔手帖十五〕……………七

〔手帖十六〕……………八

〔手帖十七〕……………三

〔住所録手帖〕……………一六

同級生……………四

〔「Capital」書込〕（參考資料）……………二

評論・感想 補遺

内部生活の現象……………五三

魂は私に告げる……………五〇

天恵の自然を利用せよ……………五六

雜編 補遺

『樂大洪水の前』の發行に就いて……………五三

講演・談話 補遺

藝術論……………五七

イブセン劇の考察……………六一

雜談……………六五

婦人と趣味……………六六

新生活に入らんとして……………六七

生活信條としての愛……………六九

『現代猶太戲曲集』推薦文……………六六

『昆虫記』推薦文……………六六

傾く時代の生める悲劇……………六七

著作資料

血に塗れた學生服……………	六三
新しき一派を創造した人……………	六四
〔發賣禁止に就いて〕……………	六五
藝術的氣分に生きよ……………	六六
女性に多く憧憬さるゝ亞米利加の詩聖……………	六七
現代人の悩み……………	六八
婦人と藝術……………	六〇
女性の獨立とは……………	六一
曰く……………	六四
有嶋武郎氏談片……………	六四
著作家が有島邸で童話に就ての批評……………	六五
佗住居を訪ねて……………	六六
〔東京病院にて〕……………	六七
彫刻に心を惹かれて着想した作……………	六七

「御柱」のヒント	三六
〔個人雜誌に就いて〕	三九
〔關西講演に就いて〕	三九
『星座』を書く	四〇
獨り行くもの	四〇
道徳より道理に克て	四二
『無産者』有島武郎へ	四四
一人行く者	四五
私の所有地	四七
書簡 補遺	五一
校異 補遺	五五
解題	六一

雜纂

文 稿

中等科三年生
有嶋武郎

保元ノ亂

仰モ保元之亂タルヤ歴史話中ノ最ナルモノニシテ初メ
天皇ノ大治四年〔消〕「白河法皇」シ給フ。鳥羽帝白河法皇ニ代
テ政ヲ院中ニ聽キ上皇ト稱ス。白河法皇嘗テ藤原璋子ヲ取リ
之ヲ宮中ニ養ヒ寵〔消〕「ヲ得」アリ既ニシテ之ヲ鳥羽帝ニ配
シ。崇徳天皇ヲ生ム。鳥羽上皇以テ己ノ子ト成「爲」サス故
ニ。天皇ニ竝「慈」ナラズ天皇モ亦上皇ニ孝ナラザリキ既ニ
シテ。鳥羽上皇薨髮シテ法皇ト號シ給フ。法皇嘗テ藤原長實
ノ女得子ヲ入「納」レ美福門院ト云ヒ大ニ寵アリ皇太弟體仁
親王ヲ生ム美福「得子」。皇太弟ノ速ニ即位シ給ハンヲ翼
フ法皇即チ「因テ」。崇徳帝ニ諭ス所アリ。帝即チ位ヲ體仁
王ニ讓「禪」ル此ニ於テ久安二年十二月「親王」大極殿ニ於
テ即位ス年ワズカニ三歳之ヲ近衛天皇ト成「爲」ス。帝ハ體
仁王ニ位ヲ讓リ給ヒテヨリ上皇ト號ス世人。法皇ヲ稱シテ本
院ト云ヒ。上皇ヲ新院ト云フ仁平元年正月左大臣藤原賴長ヲ
シテ朝廷ノ事頂ヲ内覽セシム「ニ仕ス」其父忠實ノ請ニヨル

ナリ賴長常ニ兄忠通ニ「ト」協ハス而シテ忠實ハ賴長ヲ愛
ス乃チ忠通ヲシテ政ヲ賴長ニ讓ラシメ他日忠通ノ子ニ及ハ
「シ」ントス忠通賴長ノ凶險用ユ可ラザルヲ奏ス。法皇即チ
之ヲ聽ス忠實大ニ怒「怒」リ即チ兵ヲ發シテ忠通ノ弟ヲ圍ミ
其重寶ヲ奪「奪」ハシメ以テ賴長ニ與フ賴長即チ朝權ヲ專ラ
ニスルヲ得タリ。天皇稍長シ給ヒ忠通ニ親ミ賴長ヲ遠ザケ給
ヒキ然レモ。法皇ニ厭セラレ給ヒ意ノ如クナラス常ニ鬱々ト
シテ病ヲ生シ給ヒ久壽二年七月廿三日崩シ給フ。皇子ナシ此
ニ於テ。上皇再ヒ位ニ即カンヲ冀フ。然ラズンハ重仁「親
王」ヲ立テント。重仁親王「親王」ハ上皇ノ御子ナリ英才ニ
シテ學ニ長ス朝野皆之ニ望ヲ歸ス美福「得子」。上皇ノ近衛
天皇ヲ呪詛セシト疑フ故ニ。重仁親王ヲ立ツルヲ欲セス乃チ
法皇ニ進「勸」メテ後白河天皇ヲ立テ奉ル。諱ハ雅仁年二十
九四ノ宮ト稱シ柔順ニシテ「素ヨリ」人望ナシ保元元年七月
二日鳥羽法皇崩ス。上皇入テ臨セントシ給フ時ニ藤原惟方遣
詔ト稱シ門ヲ閉ヂ拒テ入レス。上皇大ニ怒リヲ發シ給ヒ其儘
宮ニ還御アリテヒソカニ賴長ニ云テ曰ク。法皇當ニ立ツ可キ
ノ。重仁ヲ立テズシテ彼豎子ヲ立ツ其故何處ニカアル「テ天
下望ヲ失ヘリ」。朕此機ニ乘シ以テ大事ヲ舉ゲントス子夫レ如
何ト賴長朝廷ニ望ミヲ失シ。上皇ニ語事ス此ニ於テ喜テ之ヲ
贊ス内大臣實能之ヲ聞キ大ニ諫メテ曰ク假事ヲナス何ゾ神ノ
助ケアランヤト。上皇之ヲ聞キ給ハス終ニ「乃」賴長ヲ謀ミ
トナシ將士ヲ召サシム。上皇ノ謀頗ル洩レ朝野轟然「恟々」

タリ此ニ於テ 朝廷檢非違使ヲ諸方ニ遣ハシテ兵士ノ入京スル者ヲ捕ヘシム既ニシテ 法皇ノ法會ヲ田中殿ニ行ハセラル 上皇之ニ臨シ給ハス潛カニ白河北殿ニ遷リ給フ賴長等ノ將士稍聚ル 上皇使ヲ爲義ニ遣シ之ヲ召サシム爲義辭スルニ過晚ノ怪夢ヲ以ス使之ヲ許サス此ニ於テ「爲朝乃」爲朝等ノ諸子ヲ牽ヒテ詣ル乃チ策ヲ陳シテ曰ク宜シク東國ニ至リ宇治橋ヲ撤シテ之ヲ拒カン而シテ萬一敗ルヒノ時アラバ關東ニ走リ以テ院宣ヲ諸方ニ遣リ兵ヲ召サバ業ヲ遂グルニ幾何ノ時ヲカ要セン「大事成ルベシ」ト賴長之ヲ聞キ以テ不可トナス此ニ於テ爲朝出議シテ「進テ」曰ク臣久シク鎮西ニアリ大小戰實ニ「攻城夜戰」其數ヲ知ラズト雖モ「利ハ」夜戰ニ如クモノナシ故ニ今夜急ニ高松殿ヲ襲ヒ三方ヨリ火ヲ縱チテ之ヲ攻メン「バ」善ク戰フモノハ獨リ臣ガ兄義賴アルノミ清盛カ如キハ一矢以テ之ヲ倒スニ足ル可「消」キノミト」シ即チ龍興ヲ取テ 陛下ヲ徒シ奉リ 上皇ヲシテ再ヒ 天皇ノ位ニ復サシムルハ未ダ未明ニアリト「東方未大明ケザルニ事成ルベシト」賴長又之ヲ不可トシテ曰ク兩帝國ヲ爭ヒ給フ何ソ輕率ノ所爲アル可シヤ思フニ明朝南都ノ僧兵至ル可シ宜シク之ヲ待テ發セント「聽カズ」爲朝志然トシテ退キ獨語シテ曰ク長袖者何ノ用ヲカ爲サン此戰ニ敗ヲ取ラスルモノハ賴長ナラン阿兄謀ニ銳シ「富メリ」今夜必ズ來リ攻メント 天皇果シテ其夜義賴、清盛、重盛、賴政、重成、實俊等ヲ分チテ白河殿ノ諸門ヲ攻ム爲義、賴賢、賴仲、爲宗、爲成、忠政、爲賴等モ

亦分レテ諸門ヲ守ル爲賴二十餘騎ヲ率ヒテ西門ヲ固守ス清盛來リテ之ヲ攻ム爲賴能ク射リ死腹算ナシ清盛大ニヲソレ以テ退ク「善ク拒キ勝敗未ダ決セズ」義朝代テ之ヲ攻ムルモ終ニ抜ク能ハス即チ 天皇ニ奏シ火ヲ傍寺ニ縱ツ炎焰天ヲ蔽ヒ忽ニシテ宮ニウツル士率「上皇軍」大ニ騒ク「敗ル」 上皇即チ馬ニ乘シ「逃レ」給ヒ爲義等之ヲ扶持シテ以テ如意山ニ至ル道峻ニシテ容易ニ歩ム能ハス 上皇即チ諸將ヲシテ散シ去ラシム諸將皆散ス唯從フモノハ家弘父子アルノミ家弘父子上皇ヲ負ヒ奉リ翌日仁和寺ニ入テ僧ニ成リ給ハントス寺僧之ヲ拒ミ使ヲ遣シテ之ヲ奏ス 天皇乃チ兵ヲ遣シ給ヒテ 上皇ヲ捕ヘ奉リ讃岐ニ流ス賴長ハ流矢ニ中リテ死ス與黨逃レテ朝廷何處ニアルカヲ知ラズ藤原通憲策ヲ獻シ叛人ノ流罪ヲ定メテ之ヲ公ニス此ニ於テ叛人誅ヲ免ルヒトナシ多ク出テミ降ル即チ之ヲ誅セントス諸臣諫メテ曰ク弘仁以來死刑ヲ朝臣ニ施セシヲナシ如ス之ヲ助クルニト通憲之ヲ不可トナシ終ニ悉ク之ヲ誅ス清盛ノ叔父忠盛モ又入テ降ル清盛之ヲ誅シ暗ニ義朝ヲ要ス義朝悲嘆置ク能ハスト雖モ已ヲ得ス其匪ス所ノ父爲義ヲ斬リ以テ之ヲ獻ス爲朝モ尋テ降リシガ其体ノ強勇ナルヲ以テ死ヲ許シ伊豆大島ニ流ス此ニ於テ事全ク平グ「皆罪ニ伏シ事平ク」世之ヲ稱シテ保元ノ亂ト云フ

明治壬辰十月二十六日作之

敘事法

敘事法ニハ原因現狀及ヒ結果ヲ備フベシ例ヘハ（保元之亂ヲ以テ之ヲ証ス）

原因 皇室ノ現狀

相宗「家」ノ現狀

將家ノ現狀

現狀 兩軍之兵備

勝負之點

戰爭ノ期限

戰爭ノ場所

結果 皇室ハ如何ナリシヤ

相宗「家」ハ如何ナリシヤ

將家ハ如何ナリシヤ

漢文和譯

（日本外史）

平清盛攻西門其將伊藤景綱與二子伊藤五伊藤六先進爲朝射之洞五之胸而箸六之袖清盛懼懼而退獨其騎山田伊行返戰爲朝又射斃之馬逸入義朝陣鏃穿鞍大如巨鑿部將鎌田政家取而獻曰八郎君所爲也義朝曰彼弱齡未當至此詐設以怖敵耳汝嘗試之政家自呼而進爲朝曰爾非吾家人乎對曰昔爲主君主爲兇徒射中其胷爲朝大怒與二十八騎闢門突出

和譯（次行上欄外朱筆「可」）

保元ノ亂ニ爲朝新院ノ方ニ與シ奉リ士卒二十八騎ト西門ヲ守リテ在リシカ平清盛來リテ西門ヲ攻ム其將伊藤景綱其子伊藤

五及ヒ伊藤六ノ二人ヲ引キ具シテ眞。先ニ進ム爲朝之ヲ見テ射ル「其」矢五ノ胸ヲ貫キテ六ノ鎧ノ袖ニ中ル景綱歸リテ此事ヲ申セシニ清盛大ニ驚キ恐レテ他ノ門ヲ攻メントテ退ク獨其騎士山田伊行フミ止マリテ進ミシガ爲朝又之ヲ射テ斃ス馬逃レテ義朝ノ陣ニ入りケレハ義朝ノ部將鎌田政家其馬ヲ止メテ能「善」ク見ルニ鞍ノ邊ニ大ナル矢ノサミリテアリケレハ拔キテ見ルニ其大サ大キヤカナル鑿ノ如クアリキ政家之ヲ持行キテ義朝ニ獻シテ申ケルハコハ必ス西門ヲ守ラセ給フ八郎君ノ仕業ニテ候フ可シ「ラン」弱年ニモ似合ハス「ヌ」恐シキヲナシ給フカナト云フ義朝之ヲ聞キテ八郎如キ弱年ノイカテ此ノ如キヲナシ得可キ必ス外ニ人ノアリテ八郎ト詐ハリ敵ヲ驚カサントスルナラン汝行キテ之ヲ見ヨト云フ政家カシコマリヤガテ己ノ名ヲ名乗リツヒ進ム爲朝之ヲ見テ大音撃ゲ汝ハ我ノ家人ナラズヤト云ヘハ政家昔ハ君ノ家人ニテ候ヒキ去レドモ今ハ君ノ兇賊ニ與シ玉ヘルヲモテ攻メ參ラセ候ナリト云ヒツヒ射テハナツニア。ヤ。マ。タ。ズ。「此句ワルシ」爲朝ノ胷ニ中ル「ツ」爲朝大ニ怒リニクキ奴輩ノ振前カナイザ我カ手鍊ノ程見セテ膽ヲヒシギクレント云ヒツヒ惣勢モテ門ヲ後ニシテ突キ進ム

論文法

論文ハ二種ニ分ツヲ得一ハ事物論ニハ人物論之ナリ事物論ハ例ヘバ中興論大臣論養兵論等ナリ又人物論ハ例ヘハ道

眞論等ナリ人物論中ニ比較ト云フ者アリ例ヘハ豊臣秀吉徳川家康比較論ト云フガ如シ

人物論之組織法 一事實。二大體論。三立證四結論

事實ハ優劣論ニアラズト云ヘ共事實ヲ掲ク可シ而シテ研究ト鍊磨トニヨツテ之ヲ何レノ場所ニ置クモ差支ナシト雖初幸ノ輩ハ成可ク之ヲ最初ニ書クヲ善シトス但シ事實ハ其文論ニ關シタル物ノミヲ舉グルニテ足レリ

大體論ハ此事實ノ大體ニ付テ論スルヲ云フ

立證トハ即チ其證アルモノヲ掲ク可シ其證ハ格言又ハ古人ノ勳作ニ就テス可シ

結論トハ即チ此ノ如キ事實リ又證アルヲ以テ非又ハ是ナルヲ論スルヲ云フ即チ自身ノ意見ヲ述ブルナリ

平宗盛論

「平」宗盛姓ハ平氏清盛ノ子ナリ立ツテ大政大臣トナル此時ヤ既ニ「ニ當リ」義仲信濃ニ兵ヲ擧ゲ勢甚ダ盛ナリ宗盛人ヲ遣リテ之ヲ討タシムト雖モ連敗シテ歸ル宗盛此ニ於テ安德天皇ヲサシハサミ奉リ四國屋島ニ走リヌ義仲京師ニ入リテヨリ旭將軍ト稱セラル此ニ於テ之ヲ器トシ「義仲其勢ニ乗シ」高慢大ニツノリ却テ京人ヲシテ平氏ノ暴逆ニ十倍スト云ハル「ヲ思ハシム」此ニ於テ法皇漸ク之ヲ惡ミ給ヒヒソカニ賴朝ヲシテ之ヲ討タシム賴朝義經及ヒ範賴等ヲ遣リ之ヲ討シ「滑メント」義仲大ニ驚キ使ヲ屋島ニ遣ハシ共ニ之ヲフセガン

トス宗盛之ヲ聞カスシテ 天皇ニ降り奉ラハ共ニ事ヲ謀ラント云フ義仲大ニ怒リ自ラ義經等ト戰ツテ終ニ粟津ニ死ス今此事ヲ按スルニ宗盛ヲシテ其血統ヲ全カラシメント欲セハ義仲ヲ援ケ以テ事ヲナスニ如カス而シテ若シ賴朝ニ勝ツトナサンカ政權ハ再ヒ必ス平氏ニ歸ス可シ如何トナレハ義仲ノ初メ京師ニ入りシハ京人ヲシテ其暴逆平氏ニ十倍スト云ハシメ「已ニ平氏ヲ慕フノ志アリ」タレハナリ此ノ如ク平氏ニ勝ル暴行アリシカハ勢ヒ其權ハ平氏ニ歸セザルヲ得ザルナリ若シ義仲ニ組「與」セザランカ義經等ハ義仲ヲ討チ以テ必ス其勢ヲ平氏ニ向ケン然ラハ平氏ハ之ニ敵スルヲ甚ダ難キナリ今又義仲ヲ按スルニ己ノ家ヲ立テントナサハ「ノ爲ニ謀ルモ」平氏ト組「運和」シ以テ事ヲ謀ル「爲ス」ニ如カス然ラハ「滑」平氏「事平グルノ後前ノ議論ノ如ク政權ハ必ス平氏ニ落ツ可シ然レハ之ヲ」是「意トスルニ」滑「アラ」足ラズ如何トナレハ賴朝ハ英略人ニ絶シ且ツ多クノ勇臣ヲ持テリ今義仲賴朝ニ下「降」ランカ義仲ハ必ス其配下ヲ脫スル事能ハザリシナラン然リ而シテ賴朝ノ疑心義仲ヲ殺セシヤモ計リガタシ然ラハ平氏ニ屬スレハ如何必ス好結果ヲ得ベシ即チ賴朝ヲナキモノニスルノミナラズ宗盛暗愚ナルヲ以テ終ニハ其政ヲ奪フヲ實ニ手ヲヒルガヘスニ等シ然レハ此行タルヤ實ニ人倫ニ負キタルコトニシテ唯義仲ノ血統ヲ絶ヘ「ヤサ」ザラシメント欲スレハ此行ヲ以テ上策トナス事ヲ論ゼシナリ義仲ノ論此ノ如キヲ以テ宗盛其請フ所ヲカナエ以テ之ニ組スルハ後ニハ必ス其

統ヲ絶ヘラ「消」「レシナラン」ル可シ然ラハ「然バ平氏ノ爲ニ謀ラバ如何」宗盛ハ此議ヲイヅレニ結バンカ義仲ニ組「與」セハ一時其責メヲ「禍」マヌガルミト雖モ終ニハ必ス亡ビ義仲ニ反セハ必ス義經等ノ爲メニ殺サレン其時ノ結斷タル宗盛ガ義仲ニ答ヘシ言葉コソ實ニ適セリト「消」「ナサン」云フ可シ古諺ニ曰ハズヤ「毒を食ふなら皿まで」ト宗盛如何ニシテモノガルミ能ハザル故潔ギヨク其敵ニ組「與」セザリシコソ良策ト云フ可シ

觀梅ノ記

四季ノ花其數多シト雖モ降雪片々トシテ鷺毛ノ如ク寒風凜トシテ堪フ可ラザルノ日獨リ春色ヲ仰デ慢々タル風「シ」アル「容ヲ凝シテ風趣瀟洒ナ」モノ之ヲ梅花トナス余大ニ其幽ナルヲ愛シ閑ヲ得テ之ヲ觀ント欲ス會々南恩ニ書ヲ讀ムノ中梅香「フクイク」トシテ息下ニ薰ズ此ニ於テカ意直ニ決シ某ノ山園ニ行カントシ途ニ二友ヲ誘フ二友大ニ之ヲ贊シ直ニ行厨ヲ腰ニシ以テ行クコト里餘ナリ此日ヤ天「同」雲空ヲ縫「ヲ縫」フテ白ク北風凜烈袖ヲ慄シ「吹き」テ寒シ然レモ之却テ余等ガ勇快ヲ益スニ足レリ崎嶇凸凹山ヲ經川ヲ渡リ終ニ某園ニ達ス至レハ梅樹數千本既ニ笑ヒヲ呈セントシ紅白「綠樹ト」相交ハリ綠樹ノ其間ニアル實ニ幽逸「朱」「幽逸實ニ」と訂云フ可ラズ秀君子ノ名アル眞ニ當レリト云フ可シ此ニ於テ傍ノ小亭ニ憩フ暫クニシテ片々雪ノ降ルヲ見ル余等大ニ喜ヒ亭

恩ニ「倚リ」之ヲ望メハ六出「花」然トシテ北風ニ誘ハレ直ニ地上ノ白キヲ見ル梅花ヲ觀ミレハ幽深ノ花白潔ノ雪ヲ載キ笑ハントスルモノアリ娉「ピント」スルモノアリ或ハ紅唇ヲ開キ又ハ白膚ヲ晒ラス泉流ハ「コンコン」「混」トシテ清ク古「樹」林ハ蒼々トシテ聲アリ風音樹聲相和シテ樂ヲ奏スルカ如ク紅花白雪相交ツテ舞スルカ如シ此ニ於テ行厨ヲ開キ充分ノ快ヲ盡シ此所ヲ去ラントス梅花ハ媚ヒテ我ヲ招クガ如ク森樹ハ脅シテ我ヲ止メントスルカ如シ然レモ時ノ既ニ暮ナルヲ如何セン即チ戀々續「續」ニ歩ヲ進ム途ニシテ一友ノ余ニ雪塊ヲ投グルアリ余大ニ之ヲ快トシ互ニ雪投ゲヲナス雪片相合シテクダクルアリ投グルニ當ヲ得ズシテ傍樹ニ中ルアリ疾足鈍歩蹣ヲ忘レテ家ニ歸ル

作例 狗說

賴山陽

狗之爲畜善記其主。主之畜之。食不必粱肉。衣不必文綳。時投與骨。置之門牆之外。使守夜而已。而主來目外則搖尾迎之。雖昏黑未嘗失也。他人或牽而去。遠數十里。啗以美肉。而狗悲號蹣蹣不自安焉。自求其道而歸。望其舊主之門則喜躍而入。嗚呼人之不知義者謂之狗彘。以相罵辱也。彼朝飽新田氏之祿。而暮候足利氏之募者。使狗聞知之。百食其餘邪。或者較其主之恩曰。彼衆人遇我。我報各視之爾。然如狗則未嘗曰彼衆狗遇我此國狗遇我也。